

か。ダモイを夢みて果てしなく続く、シベリアの生活であつたからである。

シベリア抑留

岩手県 田山 司郎

第百七師団第九十連隊第二大隊第五中隊の衛生兵長であつた。

第九十連隊より兵隊百数十人と衛生兵二人派遣の命令が下り、八月一日ハロンアルシャンを出発。八月三日奉天の旧張作霖の兵舎に入る。満州の各部隊から派遣された混成部隊である。

八月六日、ソ連軍が侵入して来たという情報が伝わってきた。

八月十五日、重大放送があるから倉前に整列せよとの命令。皆緊張して待つ。正午ラジオより終戦の詔勅の放送。日本は降伏。皆呆然自失。なすすべを知らず悲嘆にくれる。

何日か過ぎて部隊は長蛇の列をなして行軍を始めた。夜になって奉天郊外の山中に野営した。

夜半に「敵襲」の声。我が班の栃木県出身の菊地一等兵が軽機関銃を持って飛び出して行く。

「ババン」と暗やみの中で軽機関銃の音がする。やがて静かになった。敵は退散したらしい。菊地一等兵帰って来ていわく。「夢中で撃ちまくっていたら弾がなくなつて困つた。」と。夜が明けたら松林の間に日本軍の被服が山積みになれているところがあった。昨夜は満人の襲撃だつたろうと思う。

八月末、奉天の北陵に集結し武装解除を受けた。うら若い看護婦さんたちが坊主頭になつて戦闘帽をかぶり、軍服を着て男装している。必死の変装だ。

九月の初め有蓋貨車にすし詰めにされて奉天を出発。ソ連兵のカンボーイ（歩哨）はダモイ（帰還）だと言う。汽車は走ったり停まっていたりで、まことに頼りない。一週間ほど野菜が全然食べられなかった。歩くと膝頭がガクガクする。どこかで停車していたら満人がネギを売りに来た。皆はそのネギにかじりつい

た。岩手県出身の赤坂一等兵も食べられなかったネギにかじりついていた。窮すれば通ずだ。彼はイルクーツクの収容所で昭和二十年の暮れか二十一年の冬、栄養失調のため、妻子を残して無念の死をとげた。

幾日かたつて牡丹江省の綏芬河に着いた。大量の糧秣の山だ。両舷に水車の付いた底の浅い大きな船に毎日糧秣の積み込み作業だ。対岸のソ連領に往復して運搬していた。

九月二十日ころ乗船できた。流れ豊かな黒龍江を渡りソ連領へ入る。幕舎が林立している。また有蓋貨車に詰め込まれる。さあいよいよタモイ（帰還）だと張り切る。翌日になって太陽の位置がどうもおかしいと言ひ出した。線路も曲りくねっているからだろなどと云っているうちにチタダと言う。ウラジオストクとは反対方向だ。それじゃ欧州回りで帰るのだらうと樂觀していた。だれも抑留されることなど夢にも考えていなかった。ある朝目が覚めたら汽車は停まっていた。外に出ると海だと思ったらバイカル湖だと教えられた。はるか向こうに山が青くかすんで見える。随分広

い湖だ。やがてイルクーツクに着いて下車し歩かされた。

鉄条網を張りめぐらし四隅に高い望楼のある収容所に入った。二段収容所になっている。奉天を立つてから約一か月の旅であつた。

収容所に到着して最初の作業はキャベツの収穫だつた。広い畠だ。長いうねだ。剣スコップで茎を突いて行く。ゴロリゴロリと転がるキャベツを集める。休憩、皆はキャベツにかじりつく。いくら空腹でも塩がなくてはいくらも食べられなかつた。翌日は塩を持参して大きなキャベツ四分の一くらいを食べた。

十一月、十二月になつたら食糧不足から栄養失調でバタバタ死んでいった。この分では皆死ぬかと思つた。だが胃袋も体もだんだんなれてきたのか、最初ほどは死になくなつた。食事の後でもいつも空腹感だつた。

作業の帰り軍歌を歌えと言う。指揮の見習士官に、「腹が減つて足も上がらないのに何だ」と文句を言つたら、収容所の片隅にある営倉に三日間ほどぶちこまれた。大隊長は老人の少佐だつた。民間人のオバチャ

ンと男の子を同伴していた。収容所での食事はコウリヤンのおかゆを中盒に七分目くらいと黒パン（れんがより少し大きい）を十人に一個くらいの配給だった。おかゆの中には牛かヤギの臓物が入っていた。満州から持っていった糧秣が尽きてからはエン麦のおかゆとなった。

冬のある日、もみすり作業の使役があった。製粉用の石臼だから碎け米になったり、もみが多くなったりで調節が難しかった。靴下に玄米を入れて腹に巻いたら、何と腹が冷えて我慢がでえなかった。上衣の背中や腕やズボンの尻当て等にいろいろと工夫して、帰る間際になると交替で見張りながら玄米を隠し毛皮の外套を着て、えっちらおっちら歩く。歩哨も知ってか知らずか素知らぬ顔をしている。彼らは個人的にはとてもよいのだ。班に帰ってから飯盒で計ってだが一番多いか競ったものである。一番多い者は一斗五升もあった。ペーチカで飯盒飯をたき、班で分配して皆で食べた。これはオーチンハラショー（大変よろしい）だった。腕時計等もパンと交換して腹に入ってしまった。

冬、ロシア人の家庭の流しの氷砕きの作業をしていると、馬鈴薯のおちこぼれ等が出て来る。大切に持ち帰り飯盒でゆでて食べたものだ。とにかく、腹が減って食うこと以外は何も考えることはなかった。明けても暮れても食うことばかりを考える。あるときアワの皮かぶりのおかゆが出た。いくらかんでもかんでもチャリッ、チャリッと砂をかむようだった。それと馬鈴薯の葉っぱだけはとても食べられたものではなかった。

作業はいろいろとあった。主なものはれんが工場と製塩工場だった。バイカル湖から流れ出るアンガラ河の三角州の地下水は塩水であった。直径四メートルもあるうかと思われる大きな釜で下から石炭をたいて煮つめ、遠心分離器にかけると塩が出来上がる。それをベルトコンベアで三千トンくらい入る倉庫に送る。ベルトコンベアの上に板を斜め横に置くと、塩はひとりでにこぼれ落ちる。冬の貨車積みは大変だった。凍った塩の山に穴をもんでダイナマイトを仕掛けて爆破する。割れ目に鉄棒を差し込んで動かし、大きいかたまりを今度は大ハンマーで打ち砕いて一輪車に乗せて貨

車に積み込むのである。食糧不足で衰弱しているから困難を極めた。釜に亀裂が入ると、「溶接してもうまくくっつかない」と、溶接工の兵隊は困っていた。

そうこうしているうちに春が来た。シベリアの春は急にやって来る。春と夏と一緒にやって来る。秋も駆け足でやって来る。

六月に入ったある日、身体検査があった。女の軍医が尻の皮を引っ張って、皮のよく伸びるやつを選んで帰す方の組に入れる。割り当てにあと七人足りないと言う。そこでペレポーチク（通訳）が女医に進言してくれた。この人間は体格はよく見えるけれど、胸の方が悪い、と。おかげでダモイに編入してもらった。

昭和二十二年、帰還第二十二回目の永録丸に乗船、ナホトカ港を出発。六月十五日、小雨けむる懐かしの日本の山々を見たときの感激を思い起せば、今も涙があふれ出てくる。

東舞鶴港に上陸。頭から白い粉を浴びせられ、着ているものは全部脱衣して入浴させられた。さっぱりとシベリアのあかを流して汽車の人となった。十六歳の

春から旅に出て、やっと帰りついた生まれ故郷。二十五歳の春だった。シベリアで苦勞をともししたシラミは一匹もいなくなっていた。

シベリアの自分史

岩手県 日 沢 幸太郎

一、終戦からラーゲルへ

北支の北京周辺を防衛することを任務とする独立歩兵第七九大隊は、昭和二十年六月、満州に移駐するため北京を出発した。もちろん鉄道利用で有蓋貨車であった。機関銃だけは対空防衛のため無蓋貨車で、B 29の襲撃に備えた。私はその重機関銃の責任者として対空戦についた。山海関を通過し移駐地の興安省通遼県大林に到着するまでB 29の襲撃されることもなく無事に任地に着き、この任務を終えたのであるが、旅装を解いてから間もなく何の前ぶれもなく突如ソ連軍侵攻が開始された。八月九日のソ連軍侵攻を知ったのは、